

六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c. and the
editor in chief Kotari
cover designed by little bird

11月号

たん
丹

鹿

山田六甲

み 満潮に芋名月のさし来たる

ら 落柿舎の庭を狭める紅葉かな

い 毬栗へ火挟みの先差し込みぬ

が 概算で済ませてをりし柿の数

み 水涸れて鳴の足跡著し

え 縁側に背中まるめて柿を剥く

な 棄の実葉先に指の届きたる

い 芋車水に包まれぬたるかな



と 十日の菊八海山で祝ひけり

ふ 節つけて物を言ふ癖夜なべ妻

あ 朝霧へ鹿の親子の逃げ込みぬ

ん と言ひて耳を寄せけり秋深く

に 萋の種懷紙にほぐしぬたるかな

な 仲間から尻を向けられぬたる鴨

る 瑠璃色の印材を研ぐ夜長かな

け けぶりつつ木の実の爆ぜる焚火かな

み 蜜舐めるやうに小春の日差し受く

ら 蘭の香の冷やかにせる客間かな

い 息切らせ木枯の坂上りをり

が 頑として目玉は食はず鰯大根

み 幹走る亀裂に霜の立ちぬたり

え 襟巻の狐の脚に背を打たる

な なつかしう山粧うてをりぬたる

い 一条の日矢に秋果てゆきにけり



と 豆腐揺れ鍋の湯の色やさしうす
ふ 吹き冷ます雑炊に児のじれゐたる
あ 秋桜丈の低きはよかりけれ
ん んと母の匙の湯豆腐押しやる児
に 煮込みたる肉より冬の匂ひかな
な ならかに晩秋の空暮れにけり
る 留守となり久しき庭に柿あまた
け 糸編む指のささくれ宥めつつ

京都かな昼なお灯す夏座敷

貝森光洋

きょうとかなひるなおともすなつざしき かいもりこう

白玉や静かに動く喉仏

とろろ汁豊かな昭和にもう会えぬ

よそ行きの貌して死んで村芝居

床下のほどよき暗さ濁り酒

地名を見事に使いこなした。地名を読み込んだ句はその時点で名を失敗する例が多く、掲句のように成功した例は実に少ない。掲句は京都の建物の特徴をよく捉えた。表が狭く奥行きの特徴をよく構造の町家は確かに昼でも明かりを必要とする。窓の無い細い土間を入ってゆくと中庭があり、中庭に水を打てば温度差によつて風が細い通路を伝い、涼しさを座敷に運び込む。表を質に見せ乱工夫も京都ならではの。掲句を真似、地名をだが入ると単なる観光俳句に陥るので注意が必要。地名の扱いはそれほど難しいのだ。

初 萩
笹村 政子

桐一葉浮き上がるかに落ちにけり
花野かな立ち止まる間に色殖えて
初萩の揺れ戻る枝の速さかな
まとひ来る赤蜻蛉の燃えてをり
大きな影曳きて秋蝶消えにけり

老 鶯
松本文一郎

老鶯や 仲人役の 責果す
老鶯やすし 桶並べ干しありぬ
明易の樹海 黒々してゐたり
長梅雨や舌の 少々もつれきて
頭に走る 激辛の 味夏本番

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

藤の盛り

久永つう

触れ合うて音なき藤の盛りかな
雨雲をよぎりて谷へ架かる虹
緑風の湖にボートを漕ぎにけり
縄跳びの子の手に余る縄の丈
輪に座して昼餉にすれば春の蝉

合歡の花

K O K I A

吹かば散る生まれしばかりの子蟻螂
合歡の花手にひいやりとしたりけり
水中を行くごとき影夏つばめ
黒揚羽ひるがへるとき翠なす
湯の飛んできたる日中の水鉄砲

蛍雪譚 六甲

新緑に迷ひし筈かへり来ず

梶浦玲良子

冬場は筈が帰って来ていたが、新緑の木々に迷い込んで帰ってこないのだらうというのである。確かに物理的に音は物に反射して帰ってくるが、新緑によって反射しにくくなっているのである。しかし掲句は文芸的に詠んだのである。

桐一葉浮き上がるかに落ちにけり

笹村 政子

「浮き上がるかに」というのが発見。季題は「桐一葉落つ」なので、桐の葉が落ちる風情は秋の訪れを強く感じる。その桐の葉が落ちる瞬間を見ると、大きな葉であるがゆえに、落ちていながら浮き上がるかに感じとつた目の錯覚を、句として捉えたのが鋭い。

明易の樹海黒々してゐたり

松本文一郎

樹海の不気味さを「明易」の季語を使って表現した。寝苦しく、まどろんでいたと思うともう夜が明けている。明るくなって、目の前にある樹海は、得体の知れない陰當さで黒々としている。もしかしたら、寝苦しさも樹海のせいではないか、と思うほどである。明易の樹海に意外性がある。

六花集

六甲選

五ヶ瀬川流一

盆の月揚げて幕開く村芝居
背なの傷ためらひもなく蟬生まる
飛魚の一閃島を遠ざけり
日照雨して僧衣の袖を濡らしけり
朝顔の種を袋に覚え書き
平居 滯子
三柱の位牌を清め秋立つ日
我は地に残されてゐて星祭る
寝しはずの子の目覚めけり遠花火
石段の石浮きぬたる樹の茂り
ひたすらにしりとり遊び登山道